
科学と魔術と悪名高い生徒会

有坂尚宣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

科学と魔術と悪名高い生徒会

【Nコード】

N0419Y

【作者名】

有坂尚宣

【あらすじ】

科学都市。そこに住む、主人公が、頭の痛いおっさんや、国際テロ組織なんかといろいろ闘ったり、戦わなかったり……。そんな主人公が、繰り広げる生徒会の仲間たちとの物語り……。

プロローグ

プロローグ

爆弾が、目の前にあった。

まわりには、誰もいない。

こういうときには、普通、警察とかに連絡すべきだろう。しかし、ここには110番しても、警察はこないだろう。

爆弾のタイマー（？）表示が、後、5分30秒を切った。こういうときには、どうすべきか、生徒手帳には、書いていない。普通の高校生は、こんなものを一生のうちで見つけることさえ不可能だろう。そう、普通ならば・・・

「お、何だこれ？」

思わず、オーバリアクションをしてしまった。

「どしたん？そんな驚いて。はっ、もしかしてキミがこれ、仕掛けたのかな？」

笑顔で、質問された。しかし、知らない子だ。

「いや、違う違う。俺じゃない！」

「犯人はみんなそう言うんだよ？。じゃなきゃミステリーが始まらない。犯人が、最初から自首する小説ほど面白くないものはないよ」「それは、ミステリーとは言わないんじゃない。ってそこじゃない、ほんとにやってないって」

「そうなの？ミステリー小説あまり読まないから、わかんないんだよね」

「じゃあ言うなよ！」

栗色の髪を指でいじりながら、詰まんなそうな顔で、爆弾の方を見ている少女はおそらく、いや間違いないと同じ高校に通っている生徒だろう。ーなんとたつてクラス的女子と同じ制服を着ているのだからー同じ1年生だろうか。

「ところでこの爆弾、こんなところで爆発させるの？」

不意に思考を遮断された。こんなところだからこそ、爆発させていいんじゃないのか？

「だって、この爆弾、結構大きいじゃん。爆発したら、私のお気に入りの場所までなくなっちゃう」

確かにここは、人通りが少なく、静かなため友達がいらない子や、頭の痛い子などなど、いろいろと、問題のある生徒が、集まるところだ。もしかして、この子も、頭の痛い子なんじゃ……。

「それよりも、場所が問題だ」

「うおっ」

いつの間にか、もう一人増えていた。長い黒髪で、美人という形容詞が似合う人だ。しかも、同じ問題を言ってる。

「おまえが仕掛けたのか。見た目と違って、頭いいんだな」

「誰だよ！初めて会った人への、第一声が、それって、だいぶ失礼だよな！」

「しかし、これでは、ちょっとな、やりすぎじゃないのか？」

「スルーかよ！だいたい、これ仕掛けたの、俺じゃねえーし」

「この学校を消す、ということには、私は賛成だが、さすがにこれでは、逃げ場がない。もしかして、告白した相手にでもふられて、ややくそになり、爆弾を仕掛け、その子ともども、一緒に心中する気だったのか！それは、かわいそうだったな。だが、私をまきこまないでほしい。できれば、私は長生きしたいからな」

「ふられてねーよ！告白してすらないのにふられるわけがない！」

「ということは、好きな相手はいる、ということだな」

「！……」

「あー。あのー私忘れられてませんか？」

「あっ」

「なにっ、その『あっ』って、ほんとに忘れてたの？」

「で、何が言いたいのだ、貴様は。会話に割り込んでくるほど重要な話なんだろうな」

なぜか、腰に日本刀を帯刀している美少女は、手を、刀に伸ばしながら言った。

「わー、ストップ、ストップ！この国には、銃刀法っていう法律があるんだから、切るなら、私以外にして！」

すると、今度は、自分に向けられた。

「いや、なんで俺に向ける！あつちだろ！」

「もー、そんなこといって・・・」

「変なこと言うな！わく、ごめんなさい」

「問答無用！この爆弾ともども切ってくれる！」

「そういえば、爆弾のタイマー、あと20秒きってるよ？」

「！」

「！」

みんなが、一斉に、タイマーを見た。18、17、16。やばい、逃げなきゃ。全力で走りだそうとしたところを捕まえられた。

「貴様、逃げる気か！」

「逃げなきゃやばいって、説明しないと分からないのか！」

爆弾のタイマーが、10秒をきった。

「ところで、この爆弾どうする？もうあまり時間無いけど・・・」

3、2、1。

その瞬間、視界が白く染まった。

プロローグ（後書き）

はじめまして。これが初めての作品です。更新は、遅いかもしれませんがよろしくお願いします。

自己紹介？（プロローグでやれよ！）主人公の名前は、杉田守です！

突然だが、普通の高校生が28億円という大金を目の前にする機会があるだろうか。普通なら一生見る機会もなく死んでいく人たちの方が多いいだろう。だが、目の前に確かに存在する。それを何に使うかと言つと・・・

「やっぱこれ、もらっちゃおうよ〜」

生徒会室の中で、悪だくみを考える鶉神美月くうずらかみ みつきは、さっそく一番上に乗っけてある100万円の札束を手にする。

「殺されたいのか？貴様は、」

何かと物騒な雰囲気腰に帯刀している黒髪で美人な、黒澤朱音くろさわ あかねは、刀を抜きながら言った。

「あゝ、ストップストップ、とりあえずこれは、この学校の一年間の運営費だから勝手に取らないこと。あと、朱音は銃刀法を意識すること」

生徒会長のイスに座り、足を机に投げ出している一見、不真面目そうな少女、如月香奈枝くささらぎ かなえが言った。

「学校の運営費が28億つて何に使つつもりで集めたんだ？」

とりあえず、会話に介入した俺。

「・・・おもに、キミの爆弾による校舎破壊の修繕費かな？」

「だから、俺は犯人じゃねえよ。」

「ま、それは置いといて。」

「スルーかよ！」

そのまま無視する形で香奈枝は、机の上にあった箱の中から一通の手紙を取り出した。

「えっと、一緒に届いた、手紙には、『息子をよろしくお願いします。科学都市統括理事会理事長 杉田美鈴』って書いてあるわ。

あと、『これだけあげるのだから、少し、お願いを聞いてね』と、

書いてあるわ」

「あの人は、何をやってるんだ・・・」

「良い親御さんじゃない、おかげで、私の懐も当分は、安心だね！」

「公私混合とは、けしからん」

「でもって、問題が、これなんだけど・・・」

そう香奈枝が言つと、一枚の紙を見してきた。

「なんだこれ？」

「まず内容を読んでからいつて」

「えーつと、『4時29分37秒に、科学都市付属第一高等学校の校庭に、自称、最強の魔術師が現れるから、とりあえず無力化して』、つて書いてあるけど、まず、なんで4時29分37秒なんだろう？」

「美月さん？重要なところは、そこじゃないと思うけど・・・」

「えっ、時間って、世の中じゃ一番重要視されるところじゃないの？」

「いや、そういう意味じゃなくて、やっぱ、自称最強の魔術師ってところ、ここが一番重要だろー！」

「守君、時間を守らない男の子は嫌われるよ？」

「そこじゃない！」

「ほら、香奈枝だつて言ってるじゃん」

「確かに、私は時間を重要視する」

「朱音だつて言ってるじゃん」

「・・・俺だけなのか？自称最強の魔術師が気になる人は・・・」

「そう落ち込むな、ひととずれていようが、問題は、顔と容姿だ。」

「なんか違う気がする！それって、暗に俺に向かつての忠告だろー！」

「でさー、校舎の修繕費っていくらぐらいかかるの？私たちが、残ったお金貰っちゃおうよ」

「なんでこう俺はスルーされるかな・・・」

がっくりとうなだれる守を空気のごとく無視する生徒会メンバー。

「えっと、とりあえず見積もりしたけど、修繕費が約八億七千万円、

学校運営費が二億六千万円、あ、これは各部活の部費も入ってるから。もちろん生徒会が二億五千万円ほど着服するけど。」

「って、何言ってるんだ！着服すること前提で話進めてんじゃねえよ！」

「なんでよ、だいたい毎年してることじゃない？」

「・・・この学校の生徒会は腐ってる。」

「おもに杉田守がな」

「こういうときだけ会話に介入してくるんだ、朱音は・・・」

「そこ！なんで俺だけなんだ？どっちかっていうと香奈枝と美月だろっ！」

「何を言っている。こういうときには、伝統を重んじるものだぞ、着服という名の伝統を！」

「駄目だ、この人も・・・」

そもそも、着服などと言っているが去年は、実際には学園地区合同文化祭での各高校での模擬店、歌手を呼んでの野外コンサートなど、いろいろと出費がかさむ時にお金が足りなくなると困るから、生徒会が一時的に管理して（それでも数百万程度）ためているのだが、今年の生徒会は、初めっから自分たちのためのお金を着服しようとしている。しかも億単位のお金を。

「で、結局いくら使えるわけ？おもに私が。」

「最低だな、おまえ。」

「何が最低よ！私は、他のだれよりも強くなるためにハイスペックなPCがほしいのよ！」

「ネットゲのためかよ！」

もともと、美月がネットゲームにはまっていたことは知っていたが、さすがに学校の資金を使ってまでになるとは。この前、美月の母が娘がひきこもりになった、と嘆いていた理由がわかった気がした。

「いいじゃない、人の勝手でしょ！」

「その言葉は、自分のお金を使おうとしているときに言おうか」

「何よ、校長だって、自分の愛人に貢いでたのよ！学校の資金で」「犯罪だ！すぐ警察に行こう！」

「確かに悪いことだ。とりあえず、脅しに行こう」

「何言ってるんだよ！」

「いや、相手の弱みを握ったら、脅してお金を巻き上げる権利が発生するのだから？」

「ここにも犯罪者いた！」

「ん、しょうがない、とりあえず守の口をふさごうよ。ミステリ小説的な感じで」

「あの、それって俺死んでませんか？」

「だって、協力しないんだもん！やっぱり殺してよ、朱音」

「承知した。」

そう言うのと朱音は腰の刀を取り出し切りかかった。

「ちょ、おま、」

刀が振り下ろされる。命の危機を感じた。わが人生一片どころじゃないほどの悔いあり。

覚悟をしていた守だったが、いつまでたっても自分が切られた感覚がない。もしかして、あの刀は、来れたことにも気付かずに死んでしまう刀つ立ったのでは？そう思うと、少し楽になった。ああ、近くで香奈枝の声が聞こえる・・・近くで？

「起きろ、何やってんだか」

香奈枝がため息をつくとき、美月が泣きそうな顔で言った。

「う、う、なんで守る死んじやうのさ・・・」

「！死んでいるのか、こやつは！」

「えっ、だって、ミステリー小説じゃ、ここで、『殺すつもりはなかったんです』とか言っとけば、罪が軽くなるって書いてあったよ？」

「前提が間違っているわよ、あんたたち。まず最初に朱音の刀は血が付いていない、つまり証拠がないってことよ。次に、守は自殺し

た。こういうことにしちやえば、警察だつて私たちのせいじゃない
つてことは、信用してくれるわ。さあ、自殺に見せかけるように、
準備しましょ！」

「ちよーとまったー。」

「「「うわっ」「「「

いきなり起き上つた守に驚く3人。

「おれは死んでないぞ！勝手に殺すな」

「ちっ」

「今、ちっ、つて言った。ふざけんな！なんでこんなところで死な
なきゃならない！」

「あゝあ、自殺に見せかける自信あつたのに」

「そこ！物騒なこと言つなっ！」

いろいろと物騒な生徒会だつた。

自己紹介？（プロローグでやれよ！）主人公の名前は、杉田守です！（後書き）

第一章です。これは、ストックなので早く投稿しています。

問題の自称最強の魔術師とは？

「そうこう言い合っているうちに問題の時刻が来てしまった。」

「もう時間だね。来てるかなあ。」

美月が校庭の方を見た。

「あ、誰がいる。」

「怪しい身なりのやつだな。よし、殺してしまおう。」

「うん、そうだね。」

「刀を出すな！香奈枝もその気にさせるな。」

香奈枝が、えー詰まんない、などと言っているが、とりあえずほっておこう。しかし、校庭に不審者（自称最強の魔術師）が現れたのは不思議だ。この高校は、科学都市特別法に従って、建てられているから、普通なら、この学校の生徒や、先生以外はどうかやっても入れないほどのセキュリティがあるはずなのだ。もし、そのセキュリティを突破してきたのなら、只者ではないような気がしないでもないが……。

「あ、警備員が来たよ。」

「ほんとだ、やっぱり、ただの不審者だったのかしら？」

科学都市特別法では、基本的に情報重視で漏洩などを防ぐため侵入者に対しては、どんなことをしても罪には、問われない。数年前に、北朝鮮の諜報員が、統括理事会の管理下にある、コンピュータにハッキングをしただけで、科学都市は大陸間弾道ミサイルを北朝鮮の諜報機関すべてに向けて発射し、戦争になりかけたこともあったほどだ。（どんだけ、大げさに対応してるんだ、母さんは、）

「なんか、暴れてるよ。」

「普通に縛られて、連れてかれてるな。」

「なんか、しょぼいなあ。」

「殺せなかった。」

一人だけ、物騒なことを言っているが、皆、興味はもう、例の大

金に戻ってしまっている。だが、次の瞬間信じられなことがあった。

「あれはなんだ？」

不審者の体が、光ったかと思うと、突然爆発した。校庭には、帰宅途中の生徒が、数名巻き込まれた。

「なっ、何？」

いきなりの爆発音に、生徒会の面々が、窓際に駆け寄る。

「爆発しちゃったよ」

そこに、携帯がかかってきた。母からだ。

『もしもし？守、手遅れだったかな？最強の魔術師さんが怒っちゃったみたいね。とりあえず、私の私設部隊と強い女の子一人送ったから、あなたたちは逃げなさい』

「そう言われても、みんなもう、校庭に行っちゃた・・・」

『あちゃー、とりあえず、生き残って・・・』

そう言うのと、一方的に切られてしまった。

「あゝあ、あのおじさん、とうとう、ここまで来ちゃった。」

いきなり、後ろから声が聞こえ、あわてて振り返ると、一人の少女が、立っていた。

「杉田守さんですね。私は、美鈴さんの頼みで、ここに来たんですけど、とりあえず、あのおじさんに近づかないでください。」

「えっと、おじさんって、あの自称最強の魔術師さんのことかな？」

「あ、今はそう、なのっているんですね。前まで、神の使いだ、とか叫んでいましたけど・・・」

「それで、キミは誰なのかな？」

「・・・さっき言いましたよね。私は、科学都市統括理事会理事長直轄極秘研究事項管理局特殊防衛部隊第二十七師団所属の美園桜くみその さくらです。今回は、美鈴さんの指示で、例のおじさんを、無力化しに来ました。分かりましたか？もういいませんよ」

「絶対さっきそんな説明してなかったよな！そんな長ったらしい肩がき良く嘔まらずに言えたな！」

「まだわからないんですか？検体識別コードは、『強い女の子』だ
って言ってるじゃないですか。」

「言ってるない！自分で言ったことぐらい覚えとけよ！」

強い女の子って識別コードだったんだ。それに、検体って言うて
たけど、なんかの研究の被験者なのか？

「では、さっそく」

そう言うのと、窓を開け、引っ張ってきたスリッパを開け、中
から長くて黒いものを取り出した。

「この部屋から出て行って下さい。鼓膜破れますよ？」

美園は、取り出した部品を組み立て、長いスナイパーライフルを
組み立てていた。あまり、銃のことに詳しくはないが、素人目に見
てもその長さが異常だった。ゆうに長机の縦の長さを超えており、
窓からもものすごい長さの銃身が突出している。

「早く出て行って下さい。」

いらだちを含めたような声で言われたので、従った。

「わ、分かった。」

走り気味で生徒会室を出た。とりあえず、校庭に行こうかな、と
思っただけを駆け降りる途中、ものすごい爆発音が聞こえた。

「な、何だ？」

とりあえず、一階まで、三段飛ばしで駆け降りる。

一階の入り口は、砂煙が舞っていた。目を凝らし、ようやく香奈
枝を視認することができた。

「・・・？」

香奈枝は、よく見ると、何かを持っていた。そしてこちらに走っ
てくる。近づくとつれ徐々に明らかとなる物体。それは、漆黒の銃
だった。

「守君、早く逃げた方がいいわ！あのおじさん、かなり危ない人よ
！」

「・・・それはそうと、なんでお前、銃っばいやつ持ってるんだ？」

「もう、そんなことはいいから、はやくにげましょ！」

「朱音と美月は？一体どこにいるんだ」

そう言ったところで、香奈枝は急に暗い顔をした。

「今は、動けないみたいなの」

そう言っつて、守の手を引いて、職員室前まで来た。

「携帯持つてる？私の壊れたから貸してくれない？」

「ああ、でもなんで必要なんだ？」

携帯を受け取りつつ、香奈枝は「大したことじゃないよ」と言っ
た。

科学都市の地下26層部にあるサイバーセキュリティ監視局は、
謎のハッカーによるハッキングの対策に追われていた。

「局長、システムの最深部に侵入されました。もうこっちからのア
クセス遮断は、不可能です。」

それを聞くと、局長である神埼巧くかんざき たくみは一言。

「は、またか、」

本日二回目のハッキングである。元ハッカーぞろいの精鋭たちを
集めた部隊でも全く歯が立たなかった。しかも今度は、システムの
最深部を乗っ取られたため、実質例のハッカーがこの都市を制圧し
たも同然だ。

「とりあえず、統括理事会に『フェーズ4』の勧告をしとけ」

目の前にいた、眼鏡をかけやせ細った局員にそう言った。

問題の自称最強の魔術師とは？（後書き）

どうも。これで、ストックが切れました・・・。

「じ、告白ですか？」

「よし、いけた！」

目の前で、真剣な顔でケータイをいじっている香奈枝に守は、一言も声をかけることができなかった。すっかり、暇になってしまった守は、朱音と美月がどこに行ったのか気になったので、探しに行こうとしたら、いきなり、腕を掴まれた。

「どこに行くの？」

「え、えつと、朱音と美月を探しに・・・」

「あの子たちなら真つ先に逃げたわよ。全く、生徒会長を置いて逃げるなんて」

普通逃げるだろう、と言いかけたところで、校庭の方から爆発音が聞こえた。

「またか！」

「違うわよ。それより、何なの？あなた、佐藤さんのこと好きなの？」

香奈枝がいきなりそんな話題を振ってきたので思わず身構えてしまっ。

「なんでそんなこといきなり聞くんだよ」

「あなたの携帯、その子のメールの割合が、私より高いからよ！」
露骨に不機嫌になる香奈枝。その理由がわからない守。

「何勝手にみてんだよ。人の携帯！」

「あつ、もしかして、凶星？」

「違う！春の合同体育祭の打ち合わせで、おまえが俺を委員長にした。それで、副委員長が佐藤だから必然的にメールの割合が高くなるだろ！」

「ふーん、どうだか」

これ以上何を言っても無駄だと思い反論をやめる。しばらくの沈黙、そして爆発音。

「さつきから一体何なんだ？」

すでに、生徒たちは避難しているだろうから大丈夫だろうが、これ以上にひどい爆発が起こると、自分たちが危ない。

「ほら、行くよ」

香奈枝にそう言われ、手をひかれる。今気付いたが、香奈枝と手をつないで走っている。女の子と手をつなぐイベントが少ない守にとつて、うれしいのかうれしくないのか微妙なイベントが発生した。

「な、なあ香奈枝？」

「ん？何？」

露骨に不機嫌な声で返してくる。

「おまえって、あまりこういうこと気にしないのか？」

香奈枝が、へ？、という顔で振り返り、俺の線の先を見る。そうすると、顔を赤くして。

「この変態！」

「なんでだよ！」

すばやく、手を振りほどかれる。

「おまえが先に掴んだんだろ！」

「黙って！この変態！」

そう言つと一人で、走って行ってしまった。

「どうしよう」

爆発音が響く職員室前で、途方に暮れる一人の男がいた。

「やってくれたな！」

神埼は、自分の机のモニターを掴み、今にも割れそうな力で、揺らしていた。

「局長」

「なんだ」

眼鏡をかけた気弱そうな局員が泣きそうな顔になる。それでも職

務を全うするために。

「あ、あのですね、実は、第一高校の校庭にある人物がいたんです」「人が？」

「はい、えっと、」

ファイルを忙しげにめくる局員。

「あ、えっと、その人物は、非主流的科学 フリンジサイエンス 研究地区での実験台で、検体番号01929だそうです。」

「千番台か。それなら、ほっとくのもありか。」

「は、えっ、ほっとくんですか？この非常事態を」

「構わん、今日は、もうあがっていいぞ。」

そんな神崎を不審に思いながらも局員は、局長室を出た。

「まさか、あの生き残りとは、殺せれば俺の手柄にできるじゃないか」

局長室に笑い声が響いた。

「おーい、香奈枝、どこだー」

大声で廊下を歩きながら叫ぶ一人の影があった。

「変態」

小さい声だったが、守は聞き逃さずに、声のした方に向かった。

「黙れ、俺の評判が悪くなる。」

「何よ、変態のくせに」

「だから、おまえが握ってきたんだろっが」

「それじゃない、あんたの携帯の中身、すべて見たわよ！」

そう言つと、職員用のタブレット端末を見せてきた。

「これであんたの携帯の中身と寮のPC見たんだから！この変態！」

「どうやって見たかは知らないが、すいませんでした。許して下さい」

即効土下座をした。守をみて、さらに香奈枝が追い打ちをかける。

「びしょぬれナース24時」

「すいませんでした」

さらに深々と土下座をする。

「寮の監視カメラを見たけど、あんた、かなりのロリコンね！」

「は？」

いきなり身に覚えのないことを言われた。

「なんでだよ。俺は、年上好きだぞ？」

「何あんたの性癖バラしてんのよ！この変態！」

自分の失言に気づいた守は、さらに、どげざを繰り返す。

「なに？この、『小学生のスクール水着天国』って、完全なロリコンじゃない！」

「いや、断じて俺じゃない。そんなもの俺のコレクションの中には断じて入っていないぞ！」

「あんたのコレクションで、寮にあるの？」

「ああ」

「燃やしてやるもん！あんたの寮ごと！」

「やめる！その年で放火魔になるつもりか！」

本気で、放火しそうなので止めておく。しかし、なぜ家のPCの内容まで知っているんだ。ちゃんとパスワードもかけておいたのに……。

「ちゃんと話を聞いてくれ！俺は、断じてロリコンじゃない。それに、俺の知り合いでロリコンと言ったら、西村ぐらいしかいない！」

「誰よそれ、騙されないんだから！」

「実在してるって！3年A組の西村真冴也、それ以外いない！」

「じゃあなんであんたの寮にあんなDVDがあんのよ！」

「しらねーよ、西村に聞け！」

「じゃあ、ロリコンじゃないって証明してくれたら、寮を燃やすのはやめてあげる」

「証明ってどうやればいいんだよ。」

「ん〜、じゃあ、今ここで、自分の好きな人言うこと」

「えっ、マジで?」

「マジで」

「ほんとに?」

「ほんとに」

非常に困った状況になってしまった。どうすればこの場を切り抜けるだろう。適当に誰かを言えば、こいつにあることないこと言いふらされそうだし。よし、ここは、とりあえず、強硬手段として、香奈枝が好きだということにしよう。

「香奈枝」

「へ?」

「俺が好きな人だよ。香奈枝、おまえが好きなんだよ」

言ってやった。これで、ふられて終わりだ。こいつも自分のことだから、言いふらさないだろうし、我ながら完璧な作戦だ。

「え、えっと、それは、告白ととらえていいのかな?」

「もちろん」

自信満々に言う。早くしろ、自分の完璧さに吹き出しそうなのを必死でこらえる。

「えっと、うん、いいよ、付き合ってあげる」

「そうか・・・って、ええっ!お、俺と付き合っつて?」

「何よ、自分で告白したくせに」

顔を赤面させながら、言う香奈枝に、ほんとのことを言った時の恐怖が浮かぶ。

「そ、その、ありがとな」

「・・・どういたしまして?」

会話が續かない。どうしよう。

絶体絶命な状況に立たされた守だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0419y/>

科学と魔術と悪名高い生徒会

2011年10月30日04時28分発行